

| | |
|------------------|---|
| Title | 企業環境の変化とマネジメント・コントロール・システム-U社の事例を中心として- |
| Sub Title | |
| Author | 河裾伸(Kawasuso, Shin) 伏見多美雄 |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院経営管理研究科 |
| Publication year | 1993 |
| Jtitle | |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 修士学位論文. 1993年度経営学 第990号 複写許諾が必要 |
| Genre | Thesis or Dissertation |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001993-0990 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名

河 裾 伸
(宇部興産株式会社)

主査 伏見多美雄

副査 柴田 典男

青井 倫一

所属

伏見多美雄 研究室

企業環境の変化とマネジメント・コントロール・システム

－U社の事例を中心として－

本論文は、企業の経営環境の変化に伴う経営戦略の再構築において、収益構造がキーファクターとしてどのように作用し、マネジメント・コントロール・システム(以下MCS)がそれらの要因に対していかなる調整・誘導機能を果たしてきたかを体系的に分析することによって、企業経営における収益構造、MCSの視点からの戦略立案支援をどのように実施すべきかということを示唆するために、实在企業であるU社の事例を中心に、戦後から今日にいたる企業環境・経営戦略・収益構造・MCSの変遷について具体的な考察を試みたものである。

戦後の復興期から高度経済成長の時代には、政策の支援や市場の成長が約束され、それに合った規模拡大戦略が成功要因であった。その結果として、売上や利益は向上し、収益構造に対する問題は顕在化しなかった。MCS(特に計算制度)は、戦略を誘導するよりも、内部の管理のための手段としてしか認識されていなかった。しかし、経済が低成長から成熟化傾向を強めるに従って、成長路線は行き詰まり、減量経営によるコストダウンや消費ニーズの高度化・複合化に沿った新製品・新規事業開発が経営課題となっている。このような中、収益構造は、市場ニーズや競争環境などの外部環境とともに、内部環境を左右する要因として戦略策定における重要性が増してきた。MCSも新規事業投資や事業ポートフォリオの組替えなど、戦略的な意思決定とその実行を支援するために、従来の管理会計的な技法だけでなく、戦略志向を折り込みつつあるが、インセンティブの弱さや運営上の問題から、まだ意図したような成果をあげていない。

こうした考察の結果を総括すれば、収益構造の分析は環境変化の影響や経営戦略・経営行動の結果としての事後的なチェックのためだけでなく、戦略の立案や意思決定を事前にサポートする手段の一つとして重視することが必要である。また、将来の企業環境の変化やそれに伴う収益構造の変化を先取りした経営戦略の再構築を行うためには、それらに合致した戦略的なMCSの見直しや整理が不可欠であるとともに、戦略の方向性や制度改訂の目的を全社に浸透させて、狙いとする意図が十分に機能するための働きかけも重要である。